

ドコモ、auが「2011年度事業方針」発表 スマートフォン主戦場に3社激突

NTTドコモ、KDDIがスマートフォンに大きく軸足を移す「2011年度事業方針」を発表した。この分野で先行するソフトバンクに挑戦状を叩きつけたことにより、いよいよ3大キャリアの激突が始まる。 文 村上麻里子(本誌)

通信キャリア3社の2011年3月期決算が出揃った。iPhoneの好調が続くソフトバンクは移動通信事業が「増収増益」を確保する一方、スマートフォンでソフトバンクの後塵を拝したNTTドコモとKDDIの2社は「減収増益」だった。音声ARPUの減少が続く中で、データARPU増が見込めるスマートフォンへの対応が業績を左右するようになった。

4月末、相次いで発表されたドコモ、KDDIの事業の方向性はいずれもスマートフォンを事業の基軸に置き、事業構造の抜本的変革を打ち出す戦略的なものとなっている。両社

の新たな方向性について見ていく。

ユーザーの裾野を拡大

ドコモが打ち出した「2011年度事業運営方針」には「変革」「安心・安全」「チャレンジ」の3項目が掲げられ、冒頭の「変革」では「お客様満足度の更なる向上、NO.1の継続、スマートフォン急拡大の中でもNO.1」と、率直に本音が掲げられている。

また、3番目の「チャレンジ」では「パケットARPUの伸びによる成長」に続き、「スマートフォンの推進」が掲げられている。スマートフォンに対するドコモの意気込みは明確だ。

ドコモは2010年4月に「Xperia」を発売して以降、スマートフォンのラインナップを次々と拡充してきた。その結果、2010年度のスマートフォン販売台数は252万台と、当初の目標100万台を大きく上回った。2011年度は、実績の2.4倍となる600万台を目標にしており、新機種の半分がスマートフォンとなる計画だ。

端末だけでなく、スマートフォン向けサービスの充実も図る。Xperiaは、購入希望者に一巡した後いったん販売台数が減少したものの、iモードメールをスマートフォンでも送受信できる「spモード」を開始したところ、再び台数が伸びたという。

そこで、今後iコンシェルやiチャネルなど携帯電話で人気のあるサービスを積極的にスマートフォンに取り込んでいく。その一方、電子書籍のようにスマートフォンの画面サイズや操作性を活かせるサービスにも対応し、拡充する(図表1)。

法人でも「クラウドも活用したソリューションとセット」でスマートフォン販売に注力する。

スマートフォンの普及によって拡大するパケットトラフィックへの対応として、設備構築も強化する。チャレンジでは「LTEサービス『Xi』の拡大とネットワークの進化」が重点項目とされ、前年比2倍のトラフィックに耐えるため、動的ネットワークコントロール、データオフロードなどの施策が

図表1 NTTドコモのスマートフォン戦略

